

オーガストオフィシャルハンドブック Vol.1

# Princess Holiday

～転がるりんご亭千夜一夜～

## プリホリ発売記念号



# ■ 前書

こんにちは。2002年9月に『Princess Holiday  
～転がるりんご亭千夜一夜～』を発売したオー  
ガストです。この度は、オーガストオフィシャル  
ハンドブック vol.1をお手に取って頂き、本  
当にありがとうございます。

ソフトハウスとしては、何か『プリホリ』をお  
買い上げ頂いた皆様に（もちろん最近オーガスト  
を知って頂いた皆様にも）喜んでもらえる物  
を作りたいという思いから。  
『プリホリ』の製作者としては、自分達が作った  
作品に対する愛情を、もっと表現したいという  
思いから。今回のオフィシャルハンドブックを  
制作することになりました。

また、なるべく多くの方にご笑覧頂けますよう、  
無料配布という形を取っています。もちろんソ  
フトが最優先ですが、今後も時間とお金がある  
限り、こういった小冊子を作って行ければと考  
えていますので、よろしくお願ひします。

それでは、多少のお時間を拝借致しますが、  
お楽しみ頂ければ幸いです。

## Princess Holiday ～転がるりんご亭千夜一夜～

### ■ もくじ

- 3…人生は上々だ by ベっかんこう
- 7…お姫さまに大切なこと by 神原 拓
- 14…原画&シナリオのこっそり対談

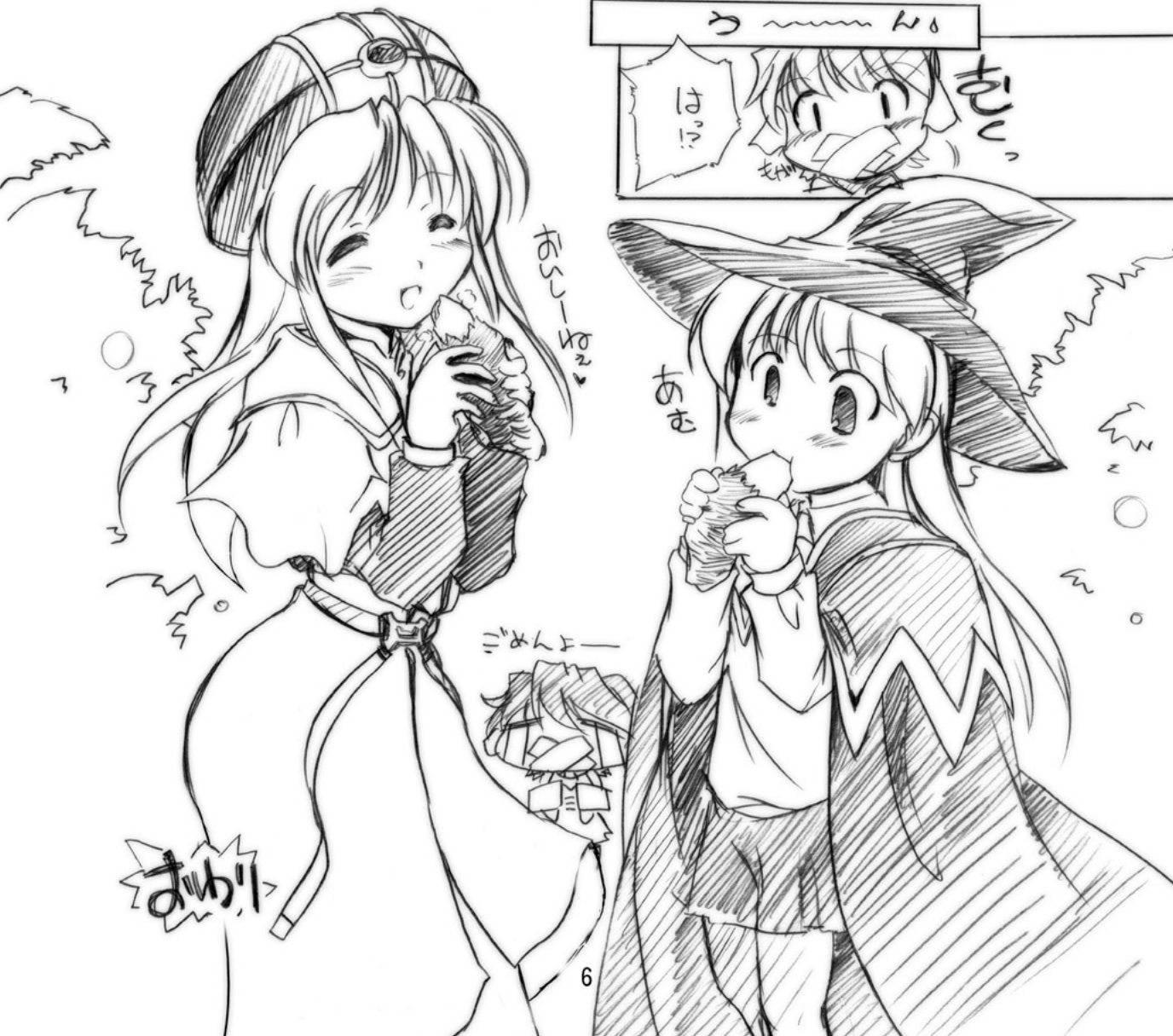
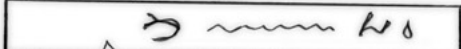
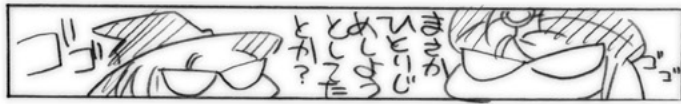












# お姫さまに 大切なこと

神原 拓

「フォートワース、団長殿がお呼びだ」

「あっ、はいっ」

「剣士隊の詰め所だぞ」

「分かりました」

ざっ

敬礼し、騎士団の副長を見送る。

……騎士団長室に呼び出されるなんて初めてだ。やっぱり、女剣士として騎士団に加わるのは難しい、という話をされるのかも。

剣士として、王城に勤めるようになって一年半が過ぎた。

それまで、男しかいなかった騎士団。

新騎士登用の試験に、女が参加したこと自体が初めてだったらしい。ほとんどが貴族の子で占められていた試験では、実技で認められ、数少ない登用枠に入ることができた。

女好きと言われる国王の口添えがあったとか、騎士団長と懇ろな関係だとか、陰口は後を立たない。

でも、最近はそのにも慣れてしまった。未だに貴族子弟の団員は目を合わせようとしてもしないけど、私は剣で身を立てるつもりで来ているから。

剣の稽古の相手にも事欠く中では、唯一騎士団長だけが、わたしの相手をしてくれている。

団長は、わたしと同じく平民の出身。

昨年までの剣術大会で何度も優勝し、その腕はシンフォニア一の誉れも高い。飄々としていて、何を考えているか分からないと言われることもある方だけ……平民出身の団員からは人望を集めているし、国王からも信頼されているとか。

入団当初は、団長の薦めで、王城勤めに必要な礼儀作法を習わせてもらった。それに、騎士団の中に何とかわたしの居場所があるのも、団長のおかげだけ……

こんこんこん

「団長殿、フォートワース参りました」

「おおエルか。まあ入れ」

「はっ」

初めて入る団長の部屋は、思ったより広く、置いてあるものは少ない。がらんとした印象だ。

「エル、最近どうだ？」

「あ、まあ……今まで通りであります」

「貴族の坊っちゃんたちは、上手く行ってるか？」

「……私よりも団長の方がよくご存知かと思えますが」

「ははは、手厳しいな。それでも、今年の新規登用者も平民出身者を増やしたんだぜ」

「しかし貴族枠が残っている以上……」

「そう言うな。貴族様に睨まれたら逆戻りしかねんからな。少しずつ、気長にいくつもりさ」

「はっ……」

窓から外を眺め、肩をすくめる団長。口ひげの下で、微かに笑いを浮かべたような気がする。

「今日、エルに来てもらったのは他でもない」

「はっ」

「エルには、騎士団から離れて、別の仕事に就いてもらうことになった」

「……っ！」

いつかはこうなると思っていた。

これは、やはり「左遷」ということ……なのだろう。

今の騎士団で、自分が浮いているのは自覚しているし、それ以上に、自分の扱いに困っている騎士団の姿を知っている。がむしやりに頑張ってはきたけど……こちら辺が潮時、なのだろうか。

「……それで、私はどちらへ行けばよろしいのでしょうか」

「俺は、今の国王陛下が、街に遊びに出た頃からの付き合いだったんだ」

「はっ」

「……っと、これは言い触らさなくてくれよ」

「仰る事が、今一つ分からないのですが……」

団長は、わたしの方を見てニヤリと笑う。

「俺は、エルには今のまま変わらなくて欲しいと思ってる。新しい任務は、陛下の一人娘、レティシア・ラ・ミュウ・シンフォニア様の警護役だ」

その日は、準備ではたばたしているうちに、終わってしまった。籍は騎士団に残るとはいえ、基本的には、姫君とずつつと一緒になることになる。

騎士団員への挨拶を済ませ、荷物の片付けが終わる頃には、とつぷりと日も暮れていた。

「ようエル。お疲れ様」

「団長」

「……この騎士団も、華が無くなって寂しくなるな」

「団長には、ずいぶんお世話になりました」

「明日は、朝イチで俺のところへ来い。陛下にエルを紹介しに行くからな」

「はっ！」

きつと、面接のようなものがあるのだろう。陛下にしてみれば、一人娘を預ける相手ということになるのだから。

「……ところで団長殿」

「ん？」

「レティシア姫とは、どのようなお方が、ご存知ですか？」

「いや、直接会って話をしたことも無いし、姫様は城の外に出ることもないからなあ。すまん」

「そうですか……」

「前任者は……どこその貴族夫人だったらしいが、胃に穴を開けて退任を申し出たらしい」

「……」

「理由は分からんがな。一筋縄では行かないのは、間違い無さそうだ」

「……ですね」

「細かいことは気にするな、エル！」

「パンパンと背中を叩いてくる団長。」

「エルなら適任に違いない。あの国王陛下の娘さんだ」

「そう……なんですか？」

「国王直属の仕事だからな。詳しくは明日陛下からお話があるだろう。今日は休め」

「分かりました」

「陛下は面白い方だぞ。楽しみにしている」

「はい……」

こうして、一年半の騎士団生活は終わりを告げた。

翌朝。

騎士団長と共に、ウォーゼル・ハイゼン・ド・シンフォニア国王陛下に目通りを願う。

これまで、国王が大好きな遊び人だったという噂だけは聞いたことがあった。けど、公式の場で国王然としている姿以外は見たことがないし、もちろん王家のプライベートな部分については全く知らない。

国王陛下、姫様……。

どんな人なんだろう？

ぎいっ

団長に連れられて、広い謁見の間に入ると、驚いたことに、わたし達以外には陛下しかいない。

「おう、団長。連れて来たな」

「陛下も、相変わらずお元氣そうで」

「騎士団自慢の華を手放すなんて、らしくないじゃないか？」

「一応、そっちの希望に添ったつもりなんですがね」

陛下と団長の気安い話し方に驚いている間に、いつの間にかわたしの紹介が始まっていた。

「……は、書類がそっちに行ってる通りだ。真面目だし、剣の腕も立つ」

「ふむ……ご苦労。下がってよいぞ」

「じゃ、あとは若い二人にお任せするとします」

かね」

団長は、わたしに向かって軽くウィンクしてみせると、くるっと踵を返し謁見の間から出て行った。

国王陛下と二人きり。

わたしが腰に下げている剣を振るっても、誰も止める人がいない……なんてことを考えるだけで、緊張感が増してくる。

「キミが、エレノア・フォートワース君か」

「はっ」

「噂は聞いているよ。騎士団でも随分やんちゃだそうじゃないか？」

「そ、そのようなことは……」

「いや、いいんだ。それくらいの方がレティにはちょうどだろう」

悪戯っぽい笑みを浮かべながら。それでも、眼光だけは鋭くわたしを見る国王陛下。

「腕の方は、団長が保証しているから心配してない。……それより、エレノア君は下町の生まれだとか」

「はい。生まれも育ちも、『呑んだくれ通り』でした」

「ふむ……では、スリヤかっぱらいは日常茶飯事だな。酔っ払い同士の喧嘩なんかも、よくあっただろう」

「はい、そういう街でした」

「ところで、騎士団の貴族子弟をどう思う？」

「はっ」

「騎士団には、貴族の坊っちゃんが多いだろう？ それについてどう思うか訊いているのだ。遠慮はしなくていい。普段思っていることを話してくれ」

「は、はい。まず、騎士団員の登用に貴族枠があるのは……」



……。

国王陛下と直に話せる機会などそうそうあるものじゃない。

青臭いとは思いつつも、この場で警護役にクビになっても構わないつもりで、これまでに思ってきたことを全て口にした。

「……と考えております、陛下」

「ふむ。今の国内政治などは考えたことが無い者の考え方だな」

「はい……」

「だが、言っていることはいちいち正しいな。こちら耳が痛いよ」

「えっ？」

「ふむ。キミなら大丈夫そうだな。エレノア・フォートワース君、キミを本日付でレティの護衛役として正式に任命する」

「あっ、は、はいっ！」

……それから、国王陛下直々に、主な仕事についての説明を受けた。

前任の方は伯爵夫人で、王族としてのたしなみや礼儀作法を中心に姫様の教育をしていたそうだが、わたしにはそういった方面は期待されていないらしい。

その代わり、城内には、王族の部屋の近くに部屋も用意されること。女官との交代はあるものの、かなり姫様のプライベートにまで張り付くことになりそうだ。

「前任の方からの引継ぎは……？」

「いや、必要無いだろう。エレノア君の好きなように接してくれればいい。警護役とは言っても、レティを不届き者から守るといふよりも……無茶なことをしないように、見張る役といっ

た方が近いかも知れんからな。はっはっは」

無茶なこと……？」

何となく、『わがままな姫』というイメージが頭を巡る。そんな姫の警護役が務まるのか、さすがに不安が無いとは言えない。

「良くも悪くも、私の娘だということさ」

「……陛下、ひとつ質問をしてもよろしいでしょうか」

「うむ」

「なぜ、数多い騎士や剣士の中で、私が警護役に選ばれたのでしょうか？」

「なぜだと思っ？」

「……いえ……分かりません」

「もちろん、キミが女性ということもあるが……エレノア君を推薦したのは、騎士団長なのだよ」

「えっ」

団長は、そんなそぶりは見せなかったけど……

「知つてのとおり、私の子供はレティ一人だ。これがどういふことか分かるな？」

「レティシア様が、王位継承権の筆頭だということでしょうか」

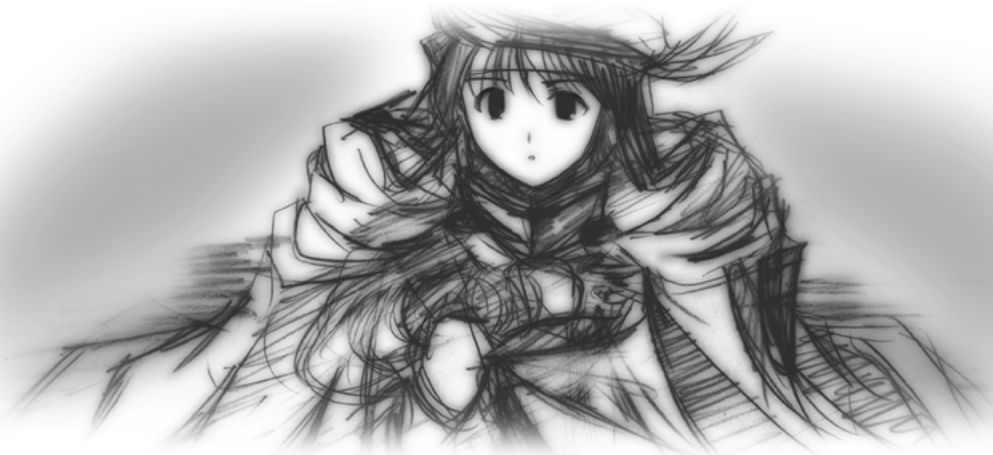
「そうだ。だから、レティの信頼を得れば……未来の騎士団長だって夢じゃない」

「それは……！」

「エレノア君は、よほど団長に信頼されているのだな。……もちろん、私もキミのことを信頼するようになったよ」

「はっ、ありがたき幸せ」

「あとは、レティがエレノア君を気に入るかどうかだけだが……まあ、あとは会ってみてからだな」玉座から立ち上がり、わたしの肩に手を置く。



「なに、大丈夫だ。きっとレティとも気が合うだろう。……そうだ、その前に妻のセレーネにも顔を見せてやってくれ」  
「はっ」

……それから、陛下の後について、普段は入ることが許されていない城の奥へ向かった。

陛下は、所々に立っている衛兵たち一人一人に声を掛ける。

「娘さんは元気か？」

「今年の剣術大会にも出るんだったな。頑張れよ」

「この前、兵舎の軒先にあつた燕の巢はどうなつた？」

これまで、王族や貴族という存在に対して抱いていた印象が、少しずつ変わっていくのを感じる。陛下は、若い頃によく街に遊びに出ているというけど……それも単なる噂ではなさそうだ。

「……さて、この部屋だ。セレーネはちょっと体調が悪くてね」  
「こんこん」

「セレーネ、入るぞ」  
「はい」

扉の中は、部屋の主の性格が出ているのだろう。きつちり整理が行き届いた感じがする空間だった。

王妃様は、椅子に腰掛けて本を読んでいたようだ。少し顔色は白いような気がするが、とても若く見える方だ。

……もしかしたら、本当に若いのかも。  
「こちらが、今度レティのお目付け役になる、

エレンア君だ」

「お初にお目に掛かります……エレンア・フォートワースと申します。よろしくお願ひします」

「ええ、こちらこそよろしくね。……私はセレーネ、元は小さな施療院を開いていた町医者よ。エレンアさんも町育ちなんですか？」

「は、はい。『呑んたくれ通り』です」  
「あら、私は『壊れた暖炉通り』よ。お隣さんね」

嬉しそうな声。

王妃様が貴族の出ではないことは聞いていたが、そんなに近い出身とは思わなかった。

王都シンフォニアの中でも、一番「こちゃこちやして貧しい地区だ。」

……セレーネ様は、穏やかに微笑んだ後、軽く咳き込む。

「セレーネ、寝ていた方がいいんじゃないか？」  
「いえ、今日は気持ちがいい日差しが差しますから……」

「無理はするなよ」  
「ええ」

肩にスカーフを掛けてあげている陛下。  
と、セレーネ様が私に向き直って深々と頭を下げた。

「少し自由に育て過ぎたかも知れませんが……私たちの娘を、どうぞよろしくお願ひします」

「はいっ。王妃様、どうかお顔を上げて下さい」  
「……」

わたしが少し慌てて言うと、セレーネ様はにっこり笑つて。

「おてんばなのは、実は私譲りの部分もあるんですよ」

「セレーネは、昔から芯が強くてなあ」

王妃の部屋を退出し、レティシア様の部屋へ向かう途中、陛下が言う。

「『医者の前ではみな平等。貴族も平民も関係ない』が口癖だったくらいだ。ずっと働き詰めで体調を崩してはいるが……あれでなかなかじゃじゃ馬なんだぞ」  
「楽しそうに言う陛下。」

陛下が側室を取らない、というのも何だか納得できる気がした。

「レティなんだが……最近、城の外の世界に興味津々でな。私とセレーネが街で出会った、なんて話を聞くと目を輝かすんだよ」

「確か、その頃は先王様がいらつしやつて」  
「ああ。兄上が王だった頃は、まさか私が王位を継ぐなどとは思っていなかったから……遊び放題だったんだがな」

「では、陛下が昔、街に出かけていたという噂は本当だったのですね」

「はっはっは。違いない……つと、ここがレティの部屋だ。エレンア君の部屋は、まだ用意をさせている途中だが、この廊下のすぐ先になる」

「はっ。早速こちらに着任します」  
「しーっ」  
「？」

「レティは、今、王立学院の博士が教師について勉強をしているはずなんだ。……様子を窺ってみよう」

そつと陛下と共に扉に近づく。  
「……」

「……その後、王立図書館の本棚で、高いところにある本に手が届かない彼女を見かけた僕は……」

部屋の中からは、滔々と男女の出会いの話が聞こえてくる。

……

「？」  
「？」

思わず顔を見合わせるわたしと陛下。

「……それからというもの、何かあると、いつも図書館の話さされるのじゃよ」

どうやら喋っているのは博士のようだ。あまり勉強の話をしているとは思えないけど……？

こんこんこん

陛下が扉を叩き、扉を開ける。

「私だ。勉強中、邪魔してすまん」

あとに続いて部屋に入ると、慌てる長い髭の博士と、部屋の中に立っているお姫様。恐らく、ベッドに腰掛けて話を聞いていたに違いない。

「こここここれは陛下っ！」

「なかなかいい話だったな」

心底楽しそうに言う陛下の言葉には、不思議と棘は感じられない。

「聞いていたのですか、お父さま！？」

「少しだけだ。今のは、誰かの伝記か？」

「いやその、お恥ずかしながら、私と家内の大昔の話など……」

「ふう。なぜそのような話になったのかは……大体想像がつくがな」

陛下の視線を感じ、部屋の隅で小さくなっているレティシア様。

「どうしてもと仰られ、如何ともし難く……」

「まあよい、気にするな。……それより、レティに新しい警護役を紹介したいのだが、いいかな？」

「かしこまりました。それではレティシア様、また明日……今日と同じところからですぞ」

「はい……」

「博士もなかなかの愛妻家じゃないか。意外だったぞ」

「はっ、面目次第もございませぬ……」

立派な白い髭の上の顔を真っ赤にしながら、博士は帰っていった。さしもの博士も、この父娘にかかると形無しのようなのだ。

「……さて、レティ」

「お父さま」

「今日は、何の勉強をする予定だった？」

「王立学院や、王立図書館などの……王立組織についての講義です……」

「それが、博士の若かりし頃の話になったというわけか。はっはっは」

陛下は、姫様の頭をぐりぐり撫でながら笑う。

「ごめんなさい、お父さま……」

「よいよい。組織も人の出会いも同じくらい重要だからな」

「はいっ」

「……と、姫様が私に気付いた。

「……？」

「おおそうだ。こちらが、今日からレティの警護役として来てもらった、エレノア・フォートワース君だ。そしてこれがレティシア……不肖の娘ということにしておこう」

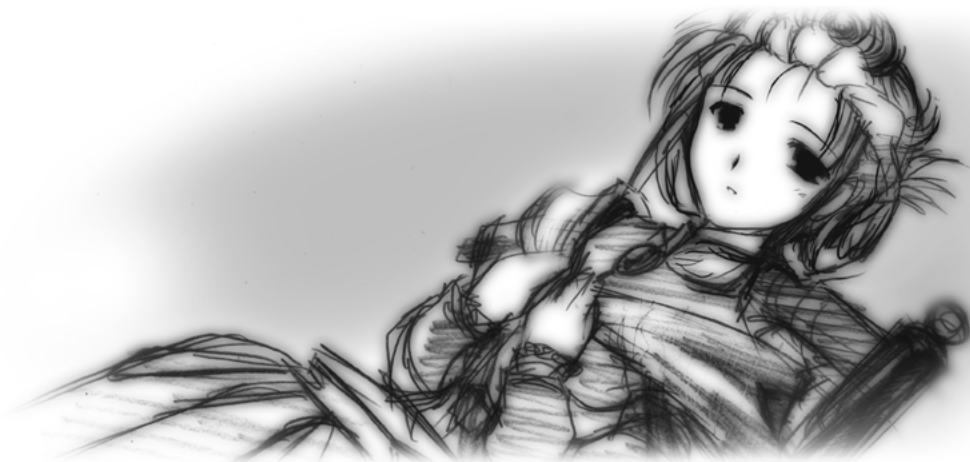
「お初にお目に掛かります、姫様」

「はじめましてっ」

わたしより、2〜3歳下だろうか。案外、屈託の無い笑顔で挨拶する方だ。

……わたしはその笑顔に、少しほっとした。

「エレノア君は、アミハナイグチ伯爵夫人の後任で、現役の騎士団員だ。レティが走って逃げたり隠れたりしても無駄だぞ」



「不届きな点もあるかとは思いますが、以後、よろしくお願い致します」

「あっ、こつこつこちらこそ」

「伯爵夫人と違って、礼儀作法にはあまりうるさくないはずだが……その分、レティといつも一緒にいてもらうつもりだ」

「はい、お父さま」

「それでは……私は戻るとするか。後は、二人で色んな話をしておきたい」

「はっ、かしこまりました」

「……そうだ、レティ」  
部屋を出かけた陛下が、振り返る。

「何ですか？」  
「エレノア君は、騎士団員とはいっても貴族の家の者ではないぞ」

レティシア様が、それを聞いて目を輝かせたように見えたのは……気のせいかな？

陛下が去り、部屋には二人きり。

「……」  
「……」

何となく、沈黙が続いていた。

お互いに、ちらちらと相手の顔を見ては、にこつと微笑みあっている。正直、自分の任務の範囲がどこまでなのかも掴みかねているのに、

王族を相手に何を喋ればいいかなんて分かるはずもなかった。

「……」

レティシア様は、何かを言いたそうにしている……ような気がする。

何となくむずむずしている感じかな？  
「レティシア様？」

「えと……あの……お互い、自己紹介をしませんか？」

「あっ、ええ、そうですね」

「では……ええと、私はレティシア・ラ・ミュウ・シンフォニアです。お父さまは国王をしていて……」

好きな食べ物から好きな花、好きな雲の形、好きな虫の音まで、自己紹介は長く続いた。好きなものは沢山挙げて、嫌いなものはほとんど言わない。

まっすぐに、奔放に育てられたお姫様のよう

だ。  
「……です。エレノアさん、よろしくお願いますね」

「いえ、こちらこそよろしくお願います」

わたし達二人しかない部屋で、互いに深く

と頭を下げる。  
傍から見たら、少しおかしいかも知れない。でも……

何となく、相手の出方を窺うような雰囲気、随分やわらいだような気がする。想像していた

「わがままなお姫様」の像は、すっかり無くなっていた。

「それでは、次は私の番ですね。名前はエレノア・フォートワースと申します……」

レティシア様に倣って、普段はしないような話を混ぜながら、自己紹介をする。話が、生まれ育った下町に及ぶと、レティシア様は目を輝かせて聞き入っていた。

……ほとんど王城からは出たことが無いと、陛下が仰っていたっけ。

「……一年半ほど騎士団に所属し、この度レティシア様の警護役を拝命しました。どうぞよろしくお願致します」

「あの、エレノアさん？」

「はっ」  
「その……レティシア様なんて呼ばれると、少し固いような気がするんです」

「それでは……姫様、でよろしいでしょうか？」

「うーん……そうですね……。お父さまのように「レティ」と呼んでもらえませんか？」

「しかし、陛下と同じようにお呼びするわけには……」

心底困ったような顔をするお姫様。  
この方は、何と言うか……本当に素直な人なんだな。思ったことは全部顔に出るし、嬉しい時は喜び、困った時は素直に困り顔になる。

今は自然と、その困っている原因を何とかしなくちゃ、という気になった。

「では単に『姫』でいかがでしょうか？」

「仕方無いですよ……それでお願致します」

「では、私のことも『エレノアさん』ではなく『エル』でお呼び下さい。……親しい友人はみなそう呼びますので」

……ふと、頭に旅に出ている幼なじみの顔が浮かぶ。が、とりあえず今は消しておこう。

「分かりました。……エル、私とも仲良くして下さいね」

「はい、もちろんですよ」  
わたしも、この姫様と本当に仲良くなりたいな、と思っていた。

「それで、その……」

「はい？」

「エルの、騎士団に入る前のお話を、もっと聞かせて欲しいです」

「姫は、あまり城の外に出たことが無いと聞き

ましたが、やはりそうなのですか？」

「ええ……そうなんです」

「もしかして……先ほどの博士のお話も？」

「そっ、それは……」

真つ赤になって俯いてしまっ姫。

「少しでも城の外のお話が聞きたくて……。だ

って、お城の中だけしか知らない私のような者

が、このまま王族として国を治めていくのは間

違っていると思うんです」

「陛下に、街に出られるようお願いしますみて

は？」

「アミハナイグチ伯爵夫人は、王位継承順位の

関係で、護衛を沢山つけるって……」

確かに、護衛が沢山ついているのでは、姫様

が望むようなことはできないだろう。

それも『お姫さま』という立場上、仕方無い

のだろうか？

本当に？

「エル？」

「はい」

「……私、一度でいいから、やってみたいこと

があるんです」

「何ですか？」

「お城の外を、自由に歩いてみたいなって……

ずっと思ってるんですよ」

ほんの少し寂しさを含んだ微笑みで、わたし

を見る姫。

……姫の言うことにも、伯爵夫人の言うこと

にも一理ある。それでも……わたしは、姫のため

にしてあげられることがあれば、何でもして

あげたい。

会ったばかりだというのに、わたしはこの姫

様が、すっかり好きになってた。

「分かりました。幸い私は剣も振るえませので、

私の中の護衛で城を出られるように……お願い  
してみます」

姫の顔が、はあつと明るくなる。

「本当ですかっ？」

「ええ。もちろんです」

「やったー！ エル、大好きっ」

私の首に抱きついてくるお姫様。

もしかしたら、私が護衛役に選ばれたのは……

……そういうことだったのかも。まんまと陛下や

団長にのせられたような気もするけど、姫の笑

顔を見ていると、まあいいかという気になって

しまっ。

こんな姫なら……護衛役も楽しい仕事になり

そう、かな？

「きつとね、エル。なるべく早くだと嬉しいな

っ」

「はっ」

「ふふっ、その返事……騎士団の方みたいです

よ」

楽しそうに笑っ姫。

『みたい』ではなく、一応本職だったのですが

……しばらくすれば、癖は抜けるでしょう」

「いつか、私のために『王城から抜け出る穴』

も掘ってくれろと嬉しいな」

「さすがに、そこまでする訳には……」

「冗談ですよっ……くすくす」

……結局、わたしの癖はそう簡単には抜ける

ものではなかった。

それに、抜け穴が本気だったことも知ること

になるんだけど……それは、また別のお話。





# 原画 & リオの 三ツツ対談



べっかんこう（以下べ）：こんにちは。べっかんこうです。

榊原拓（以下榊）：こんにちは。榊原です。

べ：今日はオーガストオフィシャルハンドブックのために、プリホリ対談をしようということですが。ふわわ。

榊：……眠そうですね。

べ：いやその、この本に載ってる漫画が、まだ描き終わってないのですよ。徹夜です～。

榊：ではサクッと対談に入りましょうか。お題は……っと。『マニュアルについてたラフ設定資料集（注1）の水着が、本編で使われていないのは何故か』だそうです。

べ：ラフも描いて、楽しみにしていたんですけどね。

榊：あの時はスタッフ一同、スケジュールを忘れて盛り上がりましたよね。「この娘はワンピだ!」とか「ス〇ー〇〇〇（注2）がシンフォニアにあるのか?」「いやあるったらある!」（笑）

べ：「原画とシナリオライターがあると言えばある!」みたいな（笑）

榊：あれはアンケート葉書でも「残念です」という御意見を多く頂きました。

べ：まあラフ設定資料集では、リベンジして沢山載せちゃいましたから（笑）。お蔵入りしないでよかったです。

榊：お気に入りほどのキャラですか？

べ：花柄バレオのレティや白で統一したフィーも捨てがたいですが……やっぱりラビスたんでしょう（笑）

榊：その「たん」禁止っつ（笑）

べ：……実は榊原さんも寝不足ですね？

榊：寝不足です。企画で。

べ：しかし、やはりあのス〇ー〇〇〇がたまりません。スコップとバケツでちびっこぶりを発揮しているのがポイントです。

榊：ビキニやフリル付きワンピもお気に入りでしたね。

べ：どれかに決める時には、一人で転がってたかも（笑）

榊：エルやレイ姉の水着も結構好きなんですが。

べ：この二人は「鍛えられた身体」がポイントですね。もっと絵の精進もしないといけません。

榊：水着は胸が有っても無くても映えますね。

べ：みんな可愛い娘のようなものですから（笑）

榊：で、なんで泳ぎに行くシーンが無かったのか、というお話なんですが。初期の箱書き（注3）にはありましたよね。

べ：うーん。やっぱり背景や立ちグラ・顔グラを、その日のためだけに全員分完成させるのが難しかった、ということのようです。

榊：制作指揮のるねさんが決断したんですね。

べ：そうです。

榊：じゃあ、せっかくなるねさんがいないので、ここは二人でるねさんの所為ということにしておきましょうか（笑）

べ：スケジュール通りに進まなかったのは棚に上げて（笑）

榊：では丸く(?)収まったところで、対談を終わりにしましょう。べっかんこうさんも漫画に戻って下さい。

べ：入稿まであと3時間です～。

2002.11.12 AM11:00 社内にて

注1：『プリホリ』本体に、初回版・通常版ともに同梱されています。

注2：スプートニクです。嘘です。

注3：シナリオの流れを図にした、見やすいあらすじのような物。

# 後記

なんとか『プリホリ』も発売され、お陰様で好評だったり批判のお言葉を頂いたり。お買い上げ頂いた皆様、本当にありがとうございました。この場を借りて、改めて御礼申し上げます。

さて、今回は「オーガストオフィシャルハンドブック」と銘打っての第一弾となりましたが、内容はいかがでしたでしょうか？ お楽しみ頂けたら何よりですし、私達の作品に対する愛情が伝われば、これに勝る喜びはありません。

そして、今回は『プリホリ』がメインのコンテンツとなりましたが、現在、新作の企画が着々と進行中です。次に「オーガストオフィシャルハンドブック」を作る際には、そちらの紹介ができるよう、スタッフ一同頑張ってますので、是非ご期待下さい。

それでは、今回はこの辺で。  
今後も、私達オーガストを暖かくお見守り頂ければ幸いです。

オーガストスタッフ一同

オーガストオフィシャルハンドブック Vol.1

Princess Holiday  
～転がるりんご亭千夜一夜～

プリホリ発売記念号

発行・2002年冬  
著作・オーガスト

連絡先・kino@august-soft.com  
WebSite・http://august-soft.com/



オーガストオフィシャルハンドブック Vol.1

Princess Holiday  
～転がるりんご亭千夜一夜～

プリホリ発売記念号



 **AUGUST**  
COPYRIGHT (C)AUGUST 2002